

小論文 法文学部（人文学科 多元地域文化コース）

注意事項

- 一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
- 二、この冊子は、表紙を除き八ページである。
- 三、「解答始め」の合図があつたら、まず、黒板等に掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配布された数と合つているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。
- 五、解答用紙は切り離さないこと。

次の文章を読んで設問に答えなさい。

—

最近、「モノのインターネット (Internet of Things : IoT)」^{（）}がよくいわれる。IoTとは、MIT (マサチューセッツ工科大学) の研究者であるケン・ハーマンが使い始めた用語で、「（インターネットに接続された）あまやまなモノたちが、人間を介さずに、インターネット上で自律的にデータをやりとりし、相互的に制御^{（せいくぎょく）}を行う」ようなシステムを指す。日本の「特定通信・放送開発事業実施円滑化法」の「附則」(2016年4月27日一部改正) では「インターネット・オブ・シングスの実現」を「インターネットに多様かつ多数の物が接続され、及びそれらの物から送信され、又はそれらの物に送信される大量の情報の円滑な流通が国民生活及び経済活動の基盤となる社会の実現」と定義している。つまり、世界中のあらゆるモノが自律的に情報を交換し合うことにより、人間がいちいちコントロールしなくとも、勝手に最適な状況をつくり出してくれるところわけだ。

冷蔵庫やエアコン、照明機器などの自律制御、身体データの自動収集による個人の健康管理などがすでに実用段階に入っている。AIやIOTを用いて、製造業を革新する潮流は、第四次産業革命とも呼ばれる。

将来的には、生物やデータなどを含む世界のあらゆるモノをインターネットに接続する「IoE (Internet of Everything)」も提唱されている。

私たちの生きている環境全体、あるいは生きてこないものがインターネットに埋め込まれる日も近いのかもしない。

—

こうした考え方は、そもそも「インターネット」の発想自体に含まれていたと言え。

現在のインターネットは、1969年にアメリカ国防総省の高等研究計画局 (Advanced Research Projects Agency : ARPA) で開発されたアーパネット (ARPANET) を発展させたものである。

「Jのアーバネット開発の立役者の一人だつた」J・C・R・リックライダー（1915—90）もまた、1960年に「ヒューリックピュータの共生 ("Man-Computer, Symbiosis")」という論文を書いた。彼がいう「共生」とは、「ヒューリックピュータが協力して直感にむかへて試行錯誤をおこない、推論上の欠陥を見出し、予期しなかつた新たな展開を開く」ことによって、現状より容易に、より早く解決」（『思想としてのパソコン』）すぬ」とある。そしてそのような「共生」を実現するには、ヒューリックと機械がリアルタイムで「マニコン」をとり続けることが必要だと述べている。

リックライダーはまた、1968年、同僚のロバート・ティラーと共に著した、「マニコン」装置としてのコンピュータ（"The Computer as a Communication Device"）による論文を発表している。そのなかで、彼らは次のように論じている。

通信技術者たちは、マニコン（通信）とは、ある地点からある地点まで、情報をコードや信号として伝達するものだと考えている。

しかし、「マニコン」は情報の送受信ではない。2つのテープレコーダーを同時にプレイし、互いに相手の音声を記録しながら、それらはマニコンしたことになるだろうか？　ならない。……われわれがいま突入しようとしているテクノロジーの時代には、われわれは、まさに生きている豊かな情報と相互作用を行う。書物や図書館を利用するときのように受動的なスタイルだけでなく、現在進行中のプロセス（ネットワークを通じて交わされるマニコン）の積極的な参加者となり、相互作用を通じて、そのプロセスに貢献するのである。それは、単に、ネットワークに接続するだけで、ネットワークから情報を得る、ところじゃない。 （Licklider & Taylor 1968：遠藤訳）

これはまさに、IOTの世界であり、その延長線上にIoTがある。それはいわば、インターネットで結ばれたすべてのモノたちが、全体として一つの〈人工知〉脳〉を構成しているようなものと見えるかもしない。

リックライダーよりもさらに早く、『世界脳（World Brain）』というアイデアを提案したのが、『タイムマシン』や『透明人間』などのSFで知られるH・G・ウェルズであった。

ウェルズの『世界脳』とは、「世界百科事典（World Encyclopedia）」^{エニシタ}「ひとつ的新しい社会的な機関」である。それは、「それぞれの項目のもとにきわめて注意深く集められ、注意深く照合して調べられ、編集され、かつ批判的に提出されたかずかずの抜粋、抜き書き、引用から成り立つべきです。それは、ひとつの集中、ひとつの明瞭化、ひとつの総合であるでしょう」（ウェルズ『世界の頭脳』）と云う。それは、「ひとつ的世界文化にとって非独断的なバイブルの役割を演ずるでしょう。（中略）世界を知的に結合する」と云ふことになるでしょう」（回書）。

ウェルズの『世界脳』は Wikipedia のような情報の結合体を想定しているように読める。しかし、モノや生体もすべて一種の「情報」であると考えるなら、『世界脳』とは IOT / IoT という世界全体を結ぶ「脳」のような存在と考えることができるだろう。

ウェルズは、ナチスの全体主義に抵抗し、民主主義を守るために『世界国家』や『世界脳』を構想したのだった。しかし、その技術は果たしてウェルズの希望通り人間に幸福をもたらすのだろうか？

四

ウェルズの『世界脳』構想を激しく批判したのは、監視社会の恐怖を描いたSF小説『1984年』で有名なジョージ・オーウェルだつた。「ウェルズ、ヒトラー、そして世界国家」（1941）というエッセイで、そうしたウェルズの理想主義こそが、ヒトラーの恐ろしさを過小評価し、結果としてヒトラーが世界に災禍をもたらすことを許してしまった原因なのだと糾弾している。「ウェルズ自身が考える『健全な理性』よりも、ナショナリズム、宗教的頑迷、封建的忠誠心の方がずっと強大な力を持つということを、彼はまったく理解することができなかつたし、現在も理解できないままである」、「ウェルズは、彼自身があまりに『健全な理性』の持ち主でありすぎるために、現代世界を理解できないのだ」とオーウェルは皮肉っぽくいうのである。

確かに、ウェルズは理想主義的であり、科学と理性の進歩を信じていたように見える。しかし、彼には絶望的な作品もあるし、彼の未来予測がむしろ悲劇の源泉を生み出してしまったという人もいる。そして、彼の希望が、現実にしばしば裏切られてきたことも事実である。彼の提唱した世界（国際）連盟は、結局、第二次世界大戦を防ぐことはできず、悲劇的な災禍が世界にもたらされた。国際連盟の理想を継承した現在の国際連合も、しばしばその非力を非難されている。

これに対しても、オーウェルは科学の進歩に対してどす黒いほどの敵意を見せる。彼の最も有名な著作『1984年』は、近未来、ビッグ・ブラザーと呼ばれる独裁者が、コンピュータ・ネットワークを駆使して、人びとを日常的に洗脳し、また、人びとのあらゆる行動を監視している。人びとが人格のない羊の群むれになってしまったような状況に疑問を持つた主人公は密かに反乱を企図きくとするが……結末には救いがない。

五

現実の1984年に、アップル社は、自社の個人向けコンピュータ Macintosh のCMで、当時世界のコンピュータ産業を牛耳つていた大型コンピュータの霸者IBMをビッグ・ブラザーにたとえ、「現実の1984年がオーウェルの描いたような1984年にならなかつたのは、Macintoshがあるからだ」と主張して、パーソナル・コンピュータの開く新しい時代を高らかに歌いあげた。

確かに、巨大なスーパーコンピュータがすべての情報を管理する中央集中制御システムはビッグ・ブラザーの監視体制を彷彿ほうふつとさせる。これに対して、個人の思考の道具としてのパソコンを自律分散ネットワークによつて接続するインターネットは、個人の究極的な〈自由〉を可能にし、誰にも平等な機会が与えられる民主主義社会の到来と期待された時期もあつた。

しかし現在、新しい監視の様態が問題化しつつある。

たとえば、近年、私たちの生活空間には膨大な数の監視カメラが設置されている。携帯電話にはGPSが装備されており、所有者の行動をリアルタイムで把握できる。交通系ICカードやクレジットカードも、利用者がいつどこで何をしていったかを逐一記録に残す。何か問題が起これば、個人の行動はほとんど追跡することができる。ネットでどのようなサイトを閲覧したか、ソーシャ

ルメディアでどのような受信／発信をしたか、すべてお見通しだ。

そして、そうした新しい監視を、セキュリティの名の下に、人びとはむしろ積極的に歓迎している面さえあるのだ。「今日の変動しやすく可動的な組織において権力が表面に出てくる電子テクノロジーのアーキテクチャ〔社会環境を変えることで人間の行動を誘導したり抑制したりすること〕は、……拘禁とは明確な結びつきがないばかりか、しばしば、エンターテインメントや消費に見られるフレキシビリティや楽しみといった特徴を併せ持つて」(バウマン＆ライアン『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について』) いると、監視社会研究の第一人者として世界的に有名なデイヴィッド・ライアン（1948—）は指摘するのである。またフランスの学者ミシェル・フーコー（1926—84）は、「生権力」という概念によつて、現代の管理社会の身体問題を論じている。

フーコーによれば、かつての権力は「従わなければ殺す」というルールによつて統治したが、現代の権力は生命の安全や人口調整という目標、あるいは福利厚生や福祉という目的を理由として、生かして統治する。たとえば、予防接種や健康診断の法制化などは、その例といえる。これらを受けた個人の身体情報は、個人を超えて集中管理されるのである。

六

では、〈世界脳〉は素朴で楽天的な科学技術信仰の産物であり、かえつてより恐怖にみちた管理社会を生み出してしまうのだろうか。

さまざまな問題を内包しつつも、〈世界脳〉というビジョンが人間の未来にとつて役に立つものであると評価するのは、ニュー・サウス・ウェールズ大学情報学部の名誉教授レイワードである。彼は論文の中で、「人間の脳は合理的であると同時に非合理的でもある。〈世界脳〉もまた間違った判断をしたり、病的な症状を示すことがあるかもしれない。しかし、それが病的であると知るためにも、〈世界脳〉は必要なのだ」と述べている。

確かに、個々の人間の脳も、邪悪なことを考え、実行する能力を持っている。しかしだからといって、その個人が邪悪を封じ、

善を行おうとする」とが不可能であるわけではない。むしろ、行動にあたって、それが、邪悪に至る道か、善に至る道かを判断するためには、われわれの〈脳〉は作動し、蓄積された〈知〉を参照し、今ダイナミックに動いている〈知〉を観察し、それらにもとづいて未来をシミュレーションするのである。

七

フーコーは歴史的経緯を含めて状況を分析考察するための〈知の考古学〉を提唱した。

彼にとって〈知の考古学〉が対象とするのは、彼が「アルシーヴ」と呼ぶものである。フランス語 archive (アルシーヴ) は、英語の archive (アーカイヴ) であり、記録／文書保管庫を意味する。つまりは「図書館」であり、「世界の知のアルシーヴ」という発想は、それを観察・分析の対象とするか、創出すべき構成体とするかの違いを別にすれば、ウェルズの〈世界脳〉と同じ発想といえる。

フーコーは次のように述べている。

アルシーヴ、それは、ただちに逃れ去る言表の出来事を保護し、逃げ去ったものとしてのその身分を未来の記憶のために保存しておくるようなものではない。そうではなくて、それは、出来事としての言表の根元そのものにおいて、そして、出来事としての言表が自らに与える身体において、そもそも最初から、言表の言表可能性にかかるシステムを定めるものである。

アルシーヴはまた、生氣をなくしてしまった諸言表の塵^{ぢり}を集め、場合によってはそれらに対し復活の奇跡を起こすようなものでもない。そうではなくて、それは、事物としての言表について、その現在性の様式を定めるものである。それは、言表が機能する仕方にかかるシステムなのだ。ただ一つの言説の大いなる不明瞭なつぶやきのなかで語られたことのすべてを統一するものであるどころか、また、保持されている特定の言説のただ中で存在することを我々に対し保証してくれるだけのものであるどころか、アルシーヴは、複数の言説を、それらの多数多様の存在において差異化し、それらに固有の持続において

種別化するものなのである。(『知の考古学』)

少しわかりにくい文章だが、ここで言われている「知」とは、普通に考えられている「知識」とは違つて、相互に関連づけられ、画一的ではなく、常にリアルタイムで変化し続ける〈現実〉の総体のことを指している。

フーコーは、「知のアルシーヴ」に目をこらすことによつて、〈知〉の暴走を監視し、同時に〈知〉の可能性を拡大することを展望したのである。

八

問題を整理しよう。

〈世界脳〉あるいはI.O.TやI.O.Eは、そのアーキテクチャによつて見えない牢獄ともなれば、また自由への扉ともなる。いや、〈世界脳〉は、〈邪惡〉への可能性を潜在させているが故に、〈邪惡〉を食い止める方法についてもヒントを与えてくれるといつた方が正確かもしれない。無論、反対に言えば、〈善〉への可能性をもつていてるが故に、より強い〈邪惡〉を実現してしまうおそれがある、ともいえる。いずれにせよ、人間たちの社会が向かおうとする方向をチェックし、反省する鏡として、〈世界脳〉を考える必要がある。

この問題について、サイバー法学の権威で、ネット上の所有権強化に対する批判で有名なローレンス・レッシグ（1961—）は次のように述べている。

これが「現状主義」の誤謬^{びゅう}というやつだ——なにかの現状を、そのるべき姿と混同してしまうこと。サイバー空間の現状というものは、確かにある。それは事実。でも、サイバー空間の現状というのは、サイバー空間の必然ではない。ネットが一つの形しかとれないなんてことはない。ネットの性質を定義づける单一のアーキテクチャなんかない。われわれが「ネット」と

呼ぶものがどれるアーキテクチャはいろいろあって、その各種アーキテクチャのなかでの生活の特徴も多様だ。(『CODE』)

「世界脳」いいかえれば、IOTやIOEによって、世界全体が巨大な人工知能のように結ばれる未来が、やがてやつてくるかもしれない。

その未来は個人を従順な一片の歯車にしてしまうのか、それとも、もつと生き活きとした存在として解放するものなのか。その答えは風のなかにある。わかっているのは、未来はあらかじめ定まつた運命ではなく、私たちが日々の生活のなかからつくり出していくものだということである。

IOTやIOEは私たちをモニタリングし、方向付けする性格を持つている。しかしそのモニタリングや管理の方向性を決定するのは、私たち自身である。そのことをいつも心に留めておく必要がある。

〔『ロボットが家にやつてきたら…——人間とAIの未来』遠藤薫著、岩波書店、二〇一八年〕

※出題にあたり原文の一部を改変し、小見出しは漢数字に置き換えた。

設問一 本文の内容を要約しなさい。(四〇〇字以内。ただし、句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含みます。)

設問二 著者の主張を踏まえつつ、人とテクノロジーの関係性について、あなたの考えを述べなさい。(六〇〇字程度。ただし、

句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含みます。)(解答欄は七〇〇字)